



藤原宮下層運河出土獣骨

藤原宮の中心部では、その下層に幅6～9m、深さ2mほどの大規模な南北溝が貫流しています。この溝は、宮の造営に南北約6mの範囲で運河を調査しました。検出した運河の規模は、幅約6.5m、深さ約1.8mでした。最下層に堆積する粗砂の骨が大量に出土しました。

最も多く出土したのは馬の骨でした。全身の骨がまとまっておらず、散乱した状態で出土したことから、埋葬や遺棄さです。頭蓋骨を割って脳を取り出した痕跡だと推定されます。757年に施行された養老律令の厩牧令によると、官の牛馬期のものですが、死んだ馬から脳等様々な資源を回収することがすでにおこなわれており、それが後に規定となって条文



関わる資材を運搬するための運河であると考えられています。昨年度の調査では、大極殿院内庭の中央部南側において、層は運河の機能時のものです。この粗砂層からは多量の土器、木製品、種子類とともに、馬、牛(右手前)や犬(中央手前)

れた馬ではなく、解体された馬であることがわかります。とくに注目されるのは、馬の頭蓋骨がすべて割られていたことが死んだ場合は皮や脳、角、胆のうを回収することが規定されています。出土した馬の骨は養老律令の施行よりも古い時代化されたものと考えられます。(左手前の馬頭蓋骨の全長約50cm)

(都城発掘調査部 大澤 正吾／埋蔵文化財センター 山崎 健)